

## 春名章二教授退職記念座談会

### Memorial Symposium on Researches of Prof. Shoji Haruna

出席者：春名章二教授（岡山大学大学院社会文化科学研究科）  
阿部顕三教授（大阪大学大学院経済学研究科）  
二神孝一教授（大阪大学大学院経済学研究科）  
柴田章久教授（京都大学経済研究所）  
神事直人教授（京都大学大学院経済学研究科）  
司会：浅野貴央教授（岡山大学大学院社会文化科学研究科）  
経済学会：岡本章教授（岡山大学大学院社会文化科学研究科）  
釣雅雄准教授（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

**岡本：**岡山大学経済学会の会長を務めております岡本と申します。本日は師走のお忙しい中、遠方よりお越しいただきどうもありがとうございました。それでは春名先生の退職記念座談会を始めたいと思います。司会の浅野先生、進行よろしくをお願いします。

**浅野：**お忙しいところ、お越しいただきありがとうございます。今回は4人の先生方にお集まりいただきました。まずは京都大学の柴田先生からお話を伺いたいと思います。特に大学院時代、あるいは助手時代、春名先生の論文から影響を受けたと伺っておりますので、そのお話から始めていただければと思います。柴田先生、よろしくお願いします。

**柴田：**春名先生と直接親しく話せるようになったのは比較的最近のことです、それまでは基本的には全て論文を通して存じ上げていたという関係です。今、浅野先生から話があった通り、大学院時代、あるいは最初に就職した大阪市立大学の助手時代、国際的学術誌に次々と春名先生の論文が発表されていて、それを見て非常に強烈な印象を受けていました。なぜそういうことになったかと言いますと、当時大阪市立大学で私の上司というか、親しくしていた先生に宮本良成先生という方がおられたのですが、彼の専門が労働者管理企業だったということがあります。また、大阪大学社会経済研究所の宮崎元先生（現オハイオ州立大学）に大阪市大に集中講義に来ていただいたりもしたのですが、彼も労働者管理企業の分野で世界的に著名な方でした。そういうことを通じて、労働者管理企業の話について自分自身としても関心を持ち、継続してフォローしていました。そうすると、春名先生が経済全体のトップジャーナルである『Economic Journal』や、フィールドのトップジャーナルである『Journal of Comparative Economics』に続けて論文を書かれていることが分かってきて、「春名」という名前が漢字ではなく、アルファベットで“Haruna”として頭の中に刻み込まれて、今に至っています。

また、1992年に春名先生は阪大社研の併任教授を務められたと思うのですが、当時私は阪大社研にしばしば出入りしていましたので、直接お会いしていないものの、社研でディスカッション・ペーパーとかセミナーの記録を見て、春名先生が非常にアクティブに活動されているという強い印象を受けておりました。そのときにも『Southern Economic Journal』に論文が発表され、やはりすごい研究者だなと思っていたのですが、そのすぐ後にも著名な国際的学術誌『Canadian Journal of Economics』などに続けて論文が掲載されるのを目にして大いに刺激を受けました。

今お話したことは春名先生が比較的若い時代の話ですが、その後もずっと引き続きいろいろ論文を学術誌で拝見しております。今、春名先生の業績全体を振り返ってみると、最初の1981年の論文から現在に至るまで絶えず国際的学術誌に公表されていることに、やはり非常に強い印象を受けます。だんだん私も年を取ってきて感じるのですが、若手の時期に論文を国際的に発表する人は結構いらっしゃると思いますが、管理職の年齢を超えて続けるのはなかなか難しいものです。しかし、春名先生はそれを同じようにずっと続けておられて、現在に至るまでもう30年以上にわたって論文を第一線で書き続けてこられており、まことに素晴らしいことだと思います。そういう意味で、研究者のスタイル、研究者のあり方として私は春名先生から強く影響を受けており、現在も意識しながら研究を進めています。ですから私自身の影響というのは、直接的というよりも、論文を通じて、あるいは研究スタイルを通じてということになるわけです。ここからは、私が理解している春名先生の仕事について簡単に説明させていただきます。

春名先生の今までの論文をずっと読んでいきますと、中心課題は二つに分類できると思います。ただし初期の研究にやや違うものがありまして、恐らく70年代終わりぐらいから80年代初期ぐらいの、大学院生時代になるのだらうと思いますが、その時代は不確実性下の投資行動、在庫投資や、企業の投資行動に関心が向けられています。そこでかなりの論文を書かれていて、最初の論文は「需要の不確実性下における独占企業の投資と投入の分析」というタイトルで『季刊理論経済学』に掲載されたものです。その後は、労働者管理企業のほうに関心を移されて、これが春名先生の80年代から現代に至るまで続いている研究のひとつの柱になっています。労働者管理企業についての当初の問題意識も、おそらくは院生時代の問題意識、リスクの問題と密接に関連していて、私が最初に見た論文もリスクの存在が労働者管理企業の行動に及ぼす影響についての研究でした。このように、春名先生の問題意識は、院生時代から連続性を持っているとは思いますが、80年代のうちに研究の中心は労働者管理企業のほうに移されている。それから1990年代の終わり、論文を見る限りでは1999年ぐらいから、「スピルオーバー効果を伴う研究開発と研究開発投資」というテーマに取り組まれていて、これが2番目の柱になっていると理解しております。これらの二つ、もしくは最初のテーマと合わせて三つですが、春名先生はこれらの課題に関して研究成果を途絶えることなく国際的に発表され続けておられるわけです。

私自身が印象に残っている論文というのを挙げさせてもらいますと、先ほどお話しした『季刊理論経済学』の



論文がその一つです。先行研究では静学モデルに限られた論文が多かったのですが、この論文では、多期間のモデルを用いてリスクが存在する環境下における独占企業の投資決定を分析されています。そして、危険回避的な独占企業は、事後的調整が不可能な投資に伴う危険性を減らすために、事後的にも調整可能な生産要素に対する需要を高めることを示されたのです。なぜこの論文が私の印象に残っているかと言いますと、浅野さんと私が2011年に書いた『International Journal of Industrial Organization』の論文が、独占企業の、しかもナイト流不確実性下の研究開発投資に関する研究ですので、同じような流れに属する研究を春名先生が遙か以前にやられていたということで、改めて強い印象を受けたからです。

80年代以降の中心的課題の一つである労働者管理企業に関する研究について言いますと、まず印象に残っているのは、1987年の『Journal of Comparative Economics』の論文です。これは私がどう考えているかよりも、世界でどういうふうに評価されているかを説明したほうが客観的にも分かりやすいでしょう。Hilbertという研究者が『Metroeconomies』と『Journal of Comparative Economics』誌上で春名先生のこの論文を引用していて、不確実性が存在する状況下における労働者管理企業の意思決定の分析に関する代表的な論文として挙げております。それから1996年の『Canadian Journal of Economics』に掲載された論文に関しても、Neary and Ulph (1997, Canadian Journal of Economics), Wen and Sasaki (2001, Economic Record) などの研究者達が、労働者管理企業の戦略的行動について分析した代表的な研究の一つとして取り上げています。Ulphさんは、環境経済学の世界的な大物であり、Nearyさんも労働者管理企業で非常に有名な方です。そういった世界的な大御所の先生方が春名先生の論文を重要な論文として引用していることを強調しておきたいと思います。

より最近の重要な論文として、『International Journal of Industrial Organization』に掲載されたものがあります。Asplund (2002, International Journal of Industrial Organization), Jellal and Wolff (2005, Journal of Economics),あるいはMeunier (2014, Review of Industrial Organization) といった人々が、リスクの存在が長期の均衡市場構造に与える効果を分析した代表的な研究として、春名先生のこの論文を挙げており、後続の研究に非常に大きな影響を与えていることがわかります。

春名先生は労働者管理企業に関する一連の研究を元に、2010年に『市場経済と労働者管理企業』と題する本を出版されておりますが、これは間違いなく日本のこの分野における基本文献になっていると思います。例えば、宮本良成先生が2010年の『Bulletin of Economic Research』に書かれた論文では、春名先生のこの本を挙げて、この本に書かれているように、労働者管理企業で独占、あるいは寡占モデルを作ると内点解が存在しないという深刻な問題があることが知られている、と述べており、本書が日本におけるこの分野の基本文献としての役割を果たしていることが分かります。

次に、春名先生の二つ目の研究課題についてお話しします。つまり、1990年代の終わりから、あるいはほぼ21世紀に入ってから、春名先生が取り組まれている研究テーマであるスピルオーバー効果を伴う研究開発についてです。代表的な研究としては、2007年、『Economic Systems』に掲載された論文を挙げるができると思います。この論文は、スピルオーバーを伴う研究開発という問題に、世界で初めて労働者管理企業を導入したものです。例えば、Luo (2013, Economic Modelling) は、労働者管理企業のイノベーションを扱った研究としてこの春名先生の論文を取り上げ、そして自身の分析

の基本的枠組みとして採用し、春名先生の研究の拡張を行っています。このように、2007年の論文はこの問題の出発点になった研究だと言えると思います。さらに、春名先生は、2011年に『Economics of Innovation and New Technology』に掲載した論文では、研究開発投資に関する過剰参入に関して分析を行い、研究開発の波及効果の存在が過剰参入に関して決定的に重要な役割を果たすことを示されたのですが、この研究も後の研究に非常に大きな影響を与えています。実際、Cha, Lee and Wang (2015, The Manchester School) や Wang and Lee (2015, Managerial and Decision Economics) では、このテーマの中の非常に重要な研究として詳細に紹介されていますし、彼らが最近『Journal of Industry, Competition and Trade』に掲載した研究は、春名先生のモデルを出発点として、それを拡張する研究を行ったもののようです。

このように、私が存じ上げている春名先生の研究は、労働者管理企業にしろ、スピルオーバーを伴う研究開発の分野にしろ、その分野の基本文献となっていて、後続の研究に対して大きな影響を与えています。また、現在もどんどん続けて論文を書かれていまして、forthcomingの論文も数本あると伺っており、是非とも見習いたいものだ強く思っております。春名先生はこのように非常に影響力のある研究成果を挙げ続けておられますが、今後も第一線で研究を続けられて、後続の研究者に大きな刺激を与えてくださることを確信しております。

**浅野：**柴田先生、ありがとうございました。次に、春名先生の研究に影響を受けた方ということで、大阪大学の二神先生、よろしくお願いします。

**二神：**また私のような者でコメントというか、そんな大げさな事を言うような者ではありませんが、コメントをさせていただきます。

柴田先生と同じと言ったらおかしいですが、私も春名先生を個人的にお会いしたとか、存じ上げるようになったのは岡山大学のセミナーに来てからでして、それほど古い話ではありません。論文自体は私が最初に就職した松山大学と2番目の立命館大学のときに、そのころ共著をしておりました広島大学の岡村誠先生と共著をさせていただいているときに、春名先生のお名前を初めて存じ上げるようになりました。1992年あるいは1993年のことだったと思います。

当時、産業組織論の論文がいろいろとパブリッシュされていて、私も今はマクロ経済学者を名乗っていますが、当時は産業組織論の論文もいくつか、寡占理論も含めて書いておりました。そのときに労働者管理企業と利潤最大化企業が共存するフレームワークで何か新しいことが言えるのではないかということを問題意識として持っていました。計算してみると、労働者管理企業は利潤最大化企業と違うような性質を持っているというのが徐々に分かってきました。例えば、独占、もしくは寡占企業に用いられる反応曲線が利潤最大化企業と違って右上がりになるということに、私当時、自分で計算して気が付いたのですが、それはもうすでに春名先生を始め、先ほど柴田先生から名前が挙がった大阪市立大学にいらっしゃった宮本先生もそういうことを指摘されておりました。それでここはもうすでにやられているということが、その当時、春名先生





の業績や宮本先生のお話を後で知るようになりました。当時、Brander and Spencerの2段階ゲームに関する論文があり、最初のステップで企業は投資を決める、2段階目で生産量をクールノー競争タイプで、クールノー均衡で決まってくるという分析をしていました。そのときに利潤最大化企業は戦略的代替関係にあります。労働者自主管理企業は先ほど言ったように反応曲線が見えないので、戦略的補完関係にあります。そうするとそのときに1期目の投資決定に影響が出てくることが分かりますので、それから何か新しいことは言えないかということで書いた論文が、僭越ですが、私と岡村先生の書いた『Journal of Comparative Economics』の論文です。その論文を書いている途中で、やはりこれは春名先生が同じようなことをやっているということに気が付きました。春名先生はモデルの構造がDixitの戦略的参入阻止の話だったので、被らなくて良かったなと安心した記憶があります。その論文も引用させていただいております。その論文は1996年に『Canadian Journal of Economics』にパブリッシュされて、私たちの論文と同じ年にパブリッシュされました。率直なところ、労働者管理企業を取り入れてどれくらい学会的に受け入れられるのだろうかということを気にしているときに、春名先生の論文が複数本パブリッシュされていることを知り、自分の論文も間違った方向に進んでいるわけではないという意味で勇気付けられたという記憶があります。

それともう一つ、その当時は気が付きませんでした。先ほど柴田先生も挙げられた労働者管理企業は内点解を持たないというトピックについても、論文を執筆していて、1回書き上げて、真面目に計算しても内点解がないということに気が付きました。固定費用を入れるとうまくそれは避けられるということに気が付き、その論文は何とかなりました。この座談会がありましたので、もっといろんな論文を読ませていただいたのですが、そうすると『Economic Journal』で、この問題はすでに春名先生が指摘されていたということに気が付きまして、もっと早く『Economic Journal』の論文を読んでおけば最初から間違えることなかったのにとちょっと後悔しています。

まとめでもないですけど、当時、国際的学術誌にパブリケーションを出さないといけないと思って、それで労働者管理企業が入った寡占理論の論文を書き始めているときに、春名先生の論文等々に出会えたというのはやはり、パブリケーションがほとんどなかったの、自信も付けさせてもらうきっかけにもなったと思っています。大体、とりあえず私の方からは以上です。

**浅野：**二神先生、ありがとうございました。これまで柴田先生には春名先生の研究全般に関してお話をいただきました。二神先生にはご自身の当初の研究に関してお話をいただきました。ではここまでのお話について、ご意見・ご質問等があればお願いします。

**二神：**率直な素朴な疑問ですが、労働者管理企業の問題に接近されたきっかけというのが何だろうかというのはずっと昔から思っておりまして、僕の場合は小宮隆太郎先生の日本企業の行動が労働者自主管理企業と似ているという論文がありまして、そこから入っていったのがきっかけですが、それよりももっと前から春名先生は労働者管理企業の問題にアプローチされています。特別なきっかけは何かあったのでしょうか。

**春名：**僕は文献（論文）をその当時比較的好く見ていました。分かったのは労働者管理企業について研究があまりやられていないことでした。確実性下においてはその研究がやられていましたが、それでも一部でした。1980年代くらいまでは、不確実性を導入した労働者管理企業の分析はまだやられて

いませんでした。それで、じゃあできるかもしれないと思ったことがきっかけです。

**浅野：**他に春名先生の過去のご研究、または研究の動機という点について、もしご質問等があればお願いいたします。

**柴田：**研究スタイルについて伺います。先ほど私が何度も申し上げた通り、春名先生は、国際的学術誌に論文を書くというスタイルをずっと続けておられます。最近はその当たり前になっていますが、春名先生の大学院時代、あるいは最初に就職された大分大学時代、それはさほど典型的なスタイルではなかっただろうと想像するのですが、実際のところいかがだったのでしょうか？



**春名：**大学院時代は、先輩が『Journal of Economic Theory』や『International Economic Review』に載せたりしていました。そこで、国内誌よりはむしろ海外に視野を広げたほうがいいかなという気持ちがありました。僕は、大分大学に就職しましたが、研究面ではちょっと田舎なので、田舎で勝負するには、東京・関西に目を移すよりも、もう直接海外と結び付いたほうがいいだろうと思って、国際的学術誌にこれから投稿しようという気持ちになりました。

**阿部：**一橋大学だと石井安憲先生も国際的学術誌に論文を書かれていますね？

**春名：**はい。

**阿部：**石井先生も不確実性で。

**春名：**そうです。

**阿部：**随分たくさん論文を書かれています、やはりそういう影響はあったのですか。

**春名：**ありました。ゼミで不確実性の論文を何本か読みました、みんなで。それが元で僕の同期の人は不確実性の論文を書き、『季刊理論経済学』に2本ほど載せました。最初は不確実性をやろうと思っていなかったのです。というのはDebreuの『Theory of Value』に基づいて修士論文を書いたのでこの方向で行こうかなと思いましたが、実は私の数学的能力がそこまでなかったのです。むしろ企業の研究のほうに特化したほうがいいだろうということになりました。しかも不確実性下の企業に関して何か論文を書けるという感触がありました。

**二神：**石井先生が春名先生の指導教授ですか。

**春名：**いや。藤野正三郎先生です。専門はマクロ経済学と金融論です。

**二神：**景気循環の大著をお持ちの先生ですね。

**春名：**はい。そうです。石井さんが不確実性下のペーパーを書かれていたので、その刺激を受けました。あと奥口孝二さんも不確実性下のペーパーを書かれていまして、奥口さんとは後で面識ができました。そういう不確実性下の企業研究を行っている人が日本に何人かおられたので、新しいことをしようとすれば、不確実性しかないかなって気がしていました。

**阿部：**藤野先生だったらマクロですよ？

**二神：**そうです。僕も産業組織論をやっていて、今はマクロ経済学です。そういう意味では、私は春名先生とは逆のルートをとっているといえるかもしれません。

**春名：**ゼミの同期で1人しかマクロをやっていませんでした。ゼミの同期が4人いましたが、1人しかマクロをやってなくて、みんなバラバラのことをやっていました。

**阿部：**じゃあ、あまり藤野先生は「これやれ」とか「あれやれ」とか言うことは？

**春名：**締め付けはなかったです。自由にやらしてもらっていました。先生からは「テーマをこれにしろ」ということを一言も言われませんでした。論文をいかにして執筆するか、そういう話が優先でしたから。

**浅野：**研究のお話はまた後ほど質問していただくことにいたします。最近10年程度でしょうか、現在に至るまで共同研究を続けておられる京都大学の神事先生に最近のご研究についてお話をいただきたいと思います。共同研究のきっかけ、これまでの研究内容、最近の研究内容と今後について、お話しいただければと思います。

**神事：**私が春名先生とお会いしたのは、2005年に私が岡山大学に赴任したときです。その後、多分2007年からだと思いますが、春名先生の科研費のプロジェクトに入れていただきました。そのプロジェクトが先ほど柴田先生も仰っていた、2000年前後頃から春名先生が取り組まれてきた技術や知識のスピルオーバーに関する研究でした。当時私はその分野にはあまり詳しくなく、貿易と環境の研究を中心にやっていました。そういう中で、もう少し違うテーマについてそろそろ研究を始めたいと思っていたところで、春名先生のほうからお話をいただいて、科研費のメンバーに入れていただきました。

最初のうちは私がその分野で何ができるのかは、正直言ってよく分からない状態で、春名先生からいろいろ教えていただきました。良かったと思うのは、春名先生は理論中心に技術スピルオーバーに関する研究をされていて、一方、同じ科研費のメンバーで岡山大学の張星源先生がその当時から特許引用のデータを使って実証的に技術スピルオーバーの分析をされていました。そこに私が入って、国際貿易の観点から何かその辺りの研究テーマについてできないかということで、徐々にそこから共同研究が発展しました。ただ、2009年に私が京都大学へ移籍しましたので、共同研究を始めて2年ぐらいいしか岡山大学には在籍していませんでした。どちらかと言うと、中心的な共同研究は2009年に私が京都大学に移籍してから発展しました。理論と実証をうまく組み合わせながら、しかも、国際経済学のフレームワークで、例えば貿易によって国際間の技術スピルオーバーがどのように進むのか、ある

いは直接投資を通じてどのようなスピルオーバーがあるのかについて、理論の観点、それから実証的な観点、両方うまく合わせることによって研究するという形で共同研究を行ってきました。気が付けばもう9年ぐらいい一緒に研究させていただいています。科研費で二つ、それ以外の研究プロジェクトでも一緒にやらせていただいています。

春名先生のお陰で、私にとっては、今までやっていなかった分野の研究に取り組むことができて、かなり研究の領域



が広がりました。現在は、私の研究の中心的な分野の一つが技術スピルオーバーに関する研究だと言えるくらいのところまで来ています。現在も研究自体は続いていて、この後もまだしばらく続けさせていただくことになると思います。今までやってきた研究について、解明された部分、解明されていない部分、いろいろありまして、どんどん関心が広がっています。春名先生の方から、これまでの共同研究について何かお話し頂けますか？

**春名：**私は理論研究なので、共同研究の中でやっぱり実証研究をやるということは私にとって非常にプラスになるとともに、神事先生に入っていたことで国際経済学についての知識がかなり増えました。単独でやっている限りでは多分、国際経済学に関してそれほど大きな関心は持たなかったし、踏み込まなかったのではないかと思います。私にとっても共同研究を行うことによって、新たな視点が増え、非常にプラスになりました。

**柴田：**スピルオーバーを伴うR&Dの研究に取り組み始めたきっかけは何なのでしょう。

**春名：**やはり『American Economic Review』に載った、d'Aspremont and Jacqueminのペーパー（1988）です。あの論文を読んで、これは何か研究ができるのではないかという気はしました。

**柴田：**そこからどんどん膨らんでいったということですね。

**春名：**はい。多分、労働者管理企業そのままではさらに進むことはまず考えられず、だから新しくステップアップするためには別の分析をしたほうが良いと考えました。

**柴田：**それからOECDから出ている書籍『経済成長論－OECD諸国における要因分析』を春名先生が訳されていますが、この経験がその後の研究に役立ったというようなことはなかったのでしょうか。

**春名：**やはり、産業組織論というか、現実のことが分かりました。要するに生産性の向上について、まだ私の頭の中には理論的なことしかなかったのですが、実証分析を通じて生産性が向上する要因というものを知ることができたという意味ではプラスになりました。

**浅野：**これまで一通り春名先生の初期の研究、中期の研究、ここ最近の研究について3人の先生方、また阿部先生にも加わっていただいております。春名先生は、2004年9月に岡山大学で行われた日本経済学会の秋の大会において、大会委員長を務められ、また日本国際経済学会でも理事および関西支部総会の大会委員長を務められました。これらのことからわかるとおり、学会活動においても重要な役割を務めてこられました。日本国際経済学会に関する活動を中心に、大阪大学の阿部先生にお話しいただければと思います。よろしくお願いします。

**阿部：**春名先生と最初にお会いしたのは、もしかするとバンクーバーでしょうか。

**春名：**そうですね。



**阿部：**私がちょうどブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）に在外研究で行っておりました。そのUBCには当時、今もそうですが、BranderとかSpencerとか、国際経済学、特に戦略的な貿易政策で非常に著名な先生方もいました。そういう意味で春名先生もバンクーバーに来られたのではないかと思います。当時はまだ国際経済学会でしたが、途中で日本国際経済学会に名前が変わりました。過去の話なので、いつごろ先生が国際経済学会に入会されたのか私



はチェックできておりません。いつごろ入会されたかということと、学会に入会された動機をまずお聞きしたいと思います。

**春名:**私も入会した年は忘れてしまいました。1990年代の半ば辺りからです。というのは、その当時、石井安憲さんが常任理事か何かをされていて、それで「学会に入らないか」と誘われました。その誘いで学会に入ったというのが経緯です。

**阿部:**当時、石井先生も随分学会の改革にすごく意欲を持っておられました。特に英語の投稿誌を作るとか、そういったことに関してかなり精力的に仕事をしていただいたと思います。

春名先生には岡山大学で日本国際経済学会の関西支部総会を開催していただきました。当時はまだ関西支部総会ということで、規模としてはそれほど大きくありませんでした。それが今は春季大会ということで、全国レベルで大会を開くようになりました。ただ関西支部総会を開くにあたって、かなりのご苦労もあったのではないかと思います。特に報告者を集めるとか、その辺りはいかがだったでしょうか。

**春名:**報告者は何とか集まりました。実際に岡山大学で開催する際には神事先生に非常に働いていただきました。それが縁で京都大学の岩本先生が神事先生に目を付けられて京都大学に引っ張られたという経緯があります。

**阿部:**日本国際経済学会も中四国のメンバーがあまりいないので、この地域での国際経済学の研究を少し活性化してもらいたいという気持ちがありました。先生にも理事をお願いして、今精力的にまた活躍していただいています。日本国際経済学会の場合は支部の役員会が2カ月に1回ほど大阪であって、春名先生にはほぼ毎回出席していただいています。日本国際経済学会は、やはり日本経済学会という非常に大きな経済の学会があって、それと比べると規模が小さい。人数的に言うと大体3分の1ぐらいですか。マルクス経済学の人たちもいますので、それでも一応1,000人ぐらいです。これも春名先生にお聞きしたいのですが、日本国際経済学会はそもそも存在意義があるのか、もしあるとすればどういう意義があるのでしょうか。私たちは会長もやり、今は顧問ですから、意義があると思っておりますが、春名先生ご自身はどのように感じておられるのか、もし何かご意見があればお願いします。

**春名:**日本経済学会は、非常にカバーする領域が広いですね。研究者の間の交流はあるようでない。研究を通じての交流はあるでしょうけど。日本経済学会は今年始めて懇親会っていうか、学会の1日目に。

**柴田:**数年前から。

**春名:**数年前からですか。あるいはああいうことをこれまでほとんど行っていないし、あとサービスが非常に悪い。『Japanese Economic Review』を4回と、あとは東洋経済新報社から書籍を1回発行している。それでほぼ活動が終わってしまう。全米経済学会に比べれば非常にサービスが悪いなという考えを昔からずっと持っていました。

それに対して日本国際経済学会は、学会の規模は小さいですが、『News Letter』やいろいろな面で会員に対してサービスが行われていると感じていました。それと学会を開催するために懇親会を開いてお互いに情報交換するという面では、非常に会員にとっては居心地がいいと思います。一つのフィー

ルドに特に限定されていますが、そのフィールドもいわゆる現代経済学とマルクス経済学の双方の人が入ってきて議論しているという面では、私は意味があると思います。

**阿部**：歴史の長い学会、例えば、金融関係では日本金融学会も同様ですね。昔はマルクス経済学の人を中心に、今はどちらかと言えば近代経済学中心になっていますね。春名先生自身は研究面で学会から逆に恩恵を受けたということはあるですか？

**春名**：学会誌に2回は書かせてもらいました。あと、最近、神事先生と共同研究をやっていることもあって、国際経済学ないし国際貿易について同じ学会からその情報を得ることができると思います。さらに論文を読む機会も増えたので、プラスになっています。

**阿部**：国際経済学自身がそのときどきで流行り廃りがあって、80年代のころは寡占理論を貿易政策に応用した戦略的貿易政策が中心で、90年代にはMelitzが出てきて、どこに行ってもMelitz, Melitzという雰囲気になった。小さいだけに何となくみんな流行りに集中してしまう部分もあると思いますが、そういうことに関してはどう思われますか。

**春名**：日本の場合には非常に流行り廃りに影響されると感じています。全米経済学会は非常に規模が大きいこともあって、研究自体に多様なところがあると感じています。日本経済学会も印象としては、産業組織の領域でも実証研究の論文がこれまで非常に少なかったと思っています。それは日本の経済分析の歴史からすると仕方がないかなと思いつつ、やはりそういう面では問題点であろうとずっと思っています。



**阿部**：もう1点だけ、また学会の話に戻ります。役員会等ではあまり時間もないので、一般的な意見というのはなかなか吸い上げにくいですが、学会を活性化していく上で、何か春名先生が思われていることはございますか。

**春名**：私、非常に難しいなという感じはします。少し思っているのは、若い人がどういう点で学会に魅力を感じているか、どういう点が足りないのかということがもう少し明確になれば、解決方法も少しは見えてくるのではないかとと思っています。あとはやはり学会誌のパブリケーションの回数ですね。できればあれがもう少し増えれば。というのは、日本の場合には大体学会誌からパブリッシュされる論文の数が非常に少ないですから、論文の引用やインパクト・ファクターがやはり海外のジャーナルに比べて低くなって、それで評価が下がるという面が多くあります。その点、何らかの方法で論文の投稿数を増やすことで学会をもう少し活性化できるかなという気はします。

**阿部**：終わります。

**浅野**：阿部先生、ありがとうございました。阿部先生から学会を中心にコメントをいただきましたが、もし他の先生方から学会に関することでご質問がございましたらお願いします。あるいは、これまでのお話の中で聞きそびれたことがございましたら、ご質問をお願いします。

**柴田**：早い段階から世界を視野に研究を進められていたとのお話でしたが、その場合、海外研究者とのネットワークをどういう形で作られていったのでしょうか。

**春名：**それは論文の投稿を通じて、ネットワークを築いていきました。初期の段階、1990年代の半ばぐらいまではエディターが非常に親切でした。論文を書いて送ったときに、私の拙い英語をエディターが直してくれました。今では絶対考えられないことです。それでネットワークができて、2、3のジャーナルのエディターとコンタクトが取れるようになりました。その分、やはりこちらもレフェリーをせざるを得ないこともありました。80年代後半から90年代は、もう国内の研究者とほとんど没交渉の状態でしたので、海外のほうがやり取りは多かったです。

**柴田：**今だと英語がひどいという理由だけでリジェクトされてしまいます。

**春名：**そうですね。あの当時、お前の英語は下手だということはあまり言われなかったですね。

**阿部：**昔は投稿して、もちろんメールもないし、エメールで論文を送っていました。実際レフェリーされて返ってくる時間も今だとわりと短いですが、昔だと半年とか1年とか、そういうのが普通の時代でしたね。

**春名：**そうですね。

**阿部：**いろいろ大変だったのではないですか？

**春名：**そうですね。初期の段階、『Journal of Comparative Economics』に一番最初に載った論文は、そもそも2年ぐらい経っても反応が全然ありませんでした。それで「どうなった？」と聞いたら、エディターが「いや、忘れていた」と。それで急遽、レフェリーに回って審査を受けたという記憶があります。

**浅野：**ある意味、おおらかな時代でしたね。

**神事：**今は論文の投稿もオンラインでできますし、投稿料の支払いもクレジットカードで払えるから非常にやりやすくなっていますね。昔は、阿部先生が仰っていたように、3部とか4部とかコピーを取って、郵送しなければなりませんでした。投稿料の支払い手続きだけでも大変だったと思いますが、春名先生はどのようにされていましたか？

**春名：**郵便局の為替を使って、支払っていました。

**二神：**郵便局の為替ですよ。

**神事：**海外の銀行に口座を開いて小切手を使えるようにされていたりしたのですか？

**春名：**海外に行って滞在したのは1996年のUBCが初めてなので、それまで全く何も作っていませんでした。

**二神：**当時は外国に郵便を出すときに、サービス名はエクスプレス・メールでしたか？特別な速達便を出すのは近所の特定郵便局では駄目で、京都市右京区の郵便局とか、上京区の郵便局とかそういう大きな郵便局に行かないと受け付けてくれませんでした。結構それだけでも自転車に乗っていくので大変でした。

**阿部：**大分大学にいたとき、岡山大学に赴任された後、ジャーナルは揃っていたのですか？

**春名：**それほど揃っていませんでした。僕が赴任して、関連する分野のジャーナルを少し入れてもらいました。

**阿部：**そういう意味では非常に苦労されたのではないのでしょうか。そもそもどういう論文があるのか



を採すのも大変かと思いますが。

**春名：**あまり苦勞とは思わなかったですね。あまり論文を読まなくてもいいかなと思って、最低限の論文でいいかなという感じでした。電子ジャーナルが出てくるまでは、岡山大学はそれほどたくさんのジャーナルが揃っているわけではありませんでした。そもそも私が平成元年に赴任したときに岡山大学のメインはマルクス経済学でしたから。その当時、藤本喬雄さんと同じ年に赴任して、藤本さんも国際的学術誌にパブリッシュしているのです、2人でパブリッシュしながら、いかに岡山大学を世界の学界の中に知らしめるかという話をしていました。

**浅野：**そろそろ時間が来てしまいました。もしこれだけは確認しておきたいというご質問があれば、ぜひお願いします。

**柴田：**若手研究者に要望というか、何か伝えていただけますか。

**春名：**特にはないです。今の若い研究者は、ほとんど国際化しているので、そういう面では特に希望はありません。そのまま、できれば定年退職まで研究を続けていただきたいというのが私の希望です。

**神事：**そのモチベーションを保つためにはどうしたらいいですか。そこを伺いたいです。

**春名：**私は分かりません。それはもう趣味の領域になるのではないのでしょうか。

**阿部：**もう一つあります。最近、やはり大学院重点化してからでしょうか。結局、都市部の大手の大学がたくさん教員を取ってしまい、少し都市部に研究者が集中してしまっています。昔は地方の大学にも非常に優秀な方がたくさんいて、それはそれである意味健全な姿だったのではないかと思います。昨今、地方の国立大学は大変な印象を持っていますが、いかがでしょう。

**春名：**そうですね。

**阿部：**やはり、危機感のようなものを感じられますか？

**春名：**やはりあります。いろいろ条件面でいくと、地方の国立大学もかなり難しくなっています。というのは、国立大学自体が独立行政法人化してから非常にいろんな報告書を提出するようになってきていまして、時間を取られてしまう弊害が出てきています。あとは私立大学に比べると個人の収入面で大きな格差があります。そういうことを考えて、やはりどうしても私立大学に向かってしまいます。その辺りの面をいかにして改善するか、何らかの対策が必要だと考えていますが、収入面での制約は非常に難しい気がします。

**浅野：**まだまだ話はつきませんが、阿部先生、二神先生、柴田先生、神事先生、いろいろお話をいただき、ありがとうございました。春名先生、ありがとうございました。

**春名：**いやいや。こちらこそ、どうもお世話になりました。

